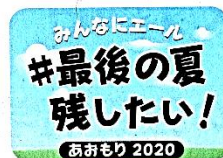


区切りの書 悔しさ超え

青森高書道部部長

澤田 佳奈さん



高総文祭 審査中止 夢の全国舞台が夢に

5日に行つたパフォーマンスの事前練習で、校歌の一節を書き込んでいく澤田さん（写真手前）11日、青森高校



5月15日。青森高校書道部部長の澤田佳奈さん（3年）は、今夏の全国高校総合文化祭（総文祭）の審査が中止となり、開催地の高知県に作品が送られなくなったと顧問の小笠原輝教諭から聞いた。書道室を出たとたん涙が頬を伝った。

澤田さんは昨年10月の県高総文祭で優秀賞に輝き、全国への切符を手にした。それから「自分の書で人を感動させたい」「全国の高校生と戦えるレベルになり、1位の文部科学大臣賞を取りたい」と、毎日心の中で誓ってから書に向かった。授業が終わるとすぐ書道室に向かい、膝の皮がむけて赤くなるまで書いた。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休校の間も「大会は開催される」と信じてラストスパートをかけ、締め切りぎりぎりまで書き続けた。

小笠原教諭は「妥協せず頑張り続ける姿には、頭が下がる思いだった」と話す。しかし5月12日、今年の総文祭は、インターネットを活用して開催することが決定。書道部門は、提出した画像をウェブ上で公開するだけで、審査はなくなつた。悔しさで現実を受け止められなかった。「一生に一度、最初で最後の全国大会だったのに。今までの頑張りはどうなってしまうのか」。マイナスイメージされなかった。

例年3年生の引退の場となる文化祭での書道パフォーマンスも中止になった。それでも今月5日、学校でパフォーマンスを行い、その様子を放送委員会が映像に残してくれることになった。

2日の放課後、1〜3年の書道部員がパフォーマンスの事前練習のため部室に集まった。縦約4枚、横約5・4枚の用紙に、全員で校歌の歌詞を書き込んでいく。澤田さんが担当するのは最後の1節「かざさんかざさん『無限』の象徴」。丁寧に書き切ったが、期末

テストのため練習が十分できていなかったこともあり「まだまだ」と、納得していない。

一つの区切りの場となるパフォーマンス。澤田さんは総文祭に行けなかった悔しさを胸に、小笠原教諭や部員への感謝の気持ちを持って「今までの集大成として精いっぱいやる」と決めた。「そしてパフォーマンスを成功させたら、勉強へと気持ちを切り替え、自分の夢の実現に向けて努力していく」と気持ちを固めている。

（熊谷慎吉）

※澤田さんの投稿はウェブ東奥に掲載しています。

東奥日報 2020年（令和2年）7月4日（土）朝刊 掲載

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです